

# 松尾邦之助とパリ

## その1 狂乱の時代

江 口 修

### 序

前稿<sup>1</sup>では小樽高等商業学校教官松尾正路とその実兄で読売新聞論説委員まで務めた松尾邦之助との関係に焦点をあてて調べてみた。正路の渡欧が1937年(昭和12年)4月であり、同年7月7日には盧溝橋事件が起き日本は長い日中戦争へと突入して行ったこともあり、パリにおける日本人の立場は悪化の一路をたどっていた。この暗い予感が切迫感をもって世界を覆う時代の直前、世界恐慌の波が日本での渡欧熱を一気に冷却させ、滞欧日本人たちには帰国を迫るようになる<sup>32</sup>、3年頃までは、まったく別のパリがあった。邦之助が渡仏した1922年にはすでに始まっていた「狂乱の時代」《Les Années folles》のパリである。松尾は滞仏経験者の先達として、島崎藤村にもっとも親しみを感じているようだが、藤村は第一次世界大戦中フランスに1916年までとどまり、貴重な体験を朝日新聞に「街上」と題して報告している。その藤村の『エトランゼ』を懐中に河盛好蔵が仏留学を果たしたのは1930年であり、「狂乱の時代」も陰りを見せ始めた頃であった。河盛の『藤村のパリ』は藤村の滞仏事情をできうるかぎりつぶさに調べ上げ、ベル・エポックの香り残すパリに育ったジェネレーションを描き出して見事であるが、孫引きながら藤村を引用しておこう。

---

<sup>1</sup> 『松尾兄弟のことなど』小樽商科大学言語センター広報第14号、2006年、pp.14-18。

各自の生活に戦争の浸潤してゆく光景は、必ずしも黒い喪服の婦人ばかりでなく、私はそれを夕方の町で見つけるいかなるひとの姿にも読むことができるように思いました。葡萄酒の壺を抱いて自分の前を通る少年にも、汚れた顔の子供にも、荷馬車に石炭を積んで巨大な馬を駆って行く男にも、子供の手を引き腰掛椅子を小脇に擁えながら公園の方から帰ってくる乳母にも、鳥打帽子を冠った年若な労働者にも、(中略) 莫迦に踵の隆い靴を穿き人の眼につく風俗をして、その日の糧を探し顔な婦人にも。<sup>2</sup>

まさに「浸潤」してゆくとともに、ベル・エポックの残滓を遙か彼方へと流し去って行ったのが第一次大戦でもあった。「この血と泥の戦場で20世紀は生まれた」<sup>3</sup>のである。その代償というわけではないが、大戦の犠牲は大きすぎた。動員された全兵士について十人に二つの棺が必要となり、フランスだけでも139万7千人の戦死者を出した。邦之助も「二十二歳の若さでパリの舗道を踏んだとき、黒い喪服をまとった第一次大戦直後の若い未亡人を見た。」<sup>4</sup>だが、すでに未亡人の姿だけではなかった。

どうしても戦争の悪夢を厄払いせねばならなかった。フランスはふたたび生きる気力をとり戻した。そして楽しむことにした。最初はつつましやかな夜や午後のダンスパーティーがやがて狂乱の時代の狂おしい熱狂にその場を譲って行く。クラシックなダンスやアルゼンチンからきた憂いたつぶりなタンゴがフォックストロットやチャールストンの早いリズムに取って代られる。<sup>5</sup>

<sup>2</sup> 『藤村のパリ』、河盛好蔵、新潮文庫、2000年、p.352。

<sup>3</sup> *Le siècle de Paris MATCH*, 2000, Paris, p. 27, par Patrick RAMBAUD.

<sup>4</sup> 『風来の記 大統領から踊り子まで』、松尾邦之助、読売新聞社、1970年、p.3。

<sup>5</sup> Op. cit., p. 45, par Gilles MARTIN-CHAUFFIER.

そして、パリはその最後の光芒ともいうべき、世界史上稀に見るコスモポリット都市として姿を現すことになるが、邦之助はこれを「黄金時代」と呼んでいる。ただこのとき日本人のヨーロッパ渡航熱の盛り上がりを大幅に遅らせる出来事がおきた。関東大震災である。歴史に「もしも」は禁物だが、大震災がなければフランスにおけるジャポニズムの進展や、ヨーロッパの芸術・文学運動との連動はもっと違った、豊かな展開を見せていたかもしれない。そのあたりの消息を傍証するようなできごとを年表風に挙げてみよう。

	ヨーロッパのできごと	日本のできごと	邦之助関係日本人の動向	同仏人他の動向
1918	第一次大戦終結	シベリア出兵, 米騒動	1913 藤田嗣治 島崎藤村渡仏	『ダダ宣言 1918』
1919	(米禁酒法発効) ヴェルサイユ条約締結 <sup>6</sup>		1916 藤村帰国	ジャック・リヴィエール N.R.F.誌編集長に
1920	国際連盟創設	戦後恐慌	武林夢想庵渡仏	『エスプリ・ヌーヴォー』 創刊
1921	ヒトラーナチス党党首に	原敬首相暗殺		
1922			邦之助渡仏	
1923		関東大震災	※辰野隆東京大学文学部 フランス文学科初代専任(助教授) 太宰施門京都大学文学部 フランス文学科創立 メンバー(助教授) <sup>7</sup>	

<sup>6</sup> 日本は西園寺公望と牧野伸顕を代表として送っている。西園寺について邦之助は次のように評価している。「西園寺公が、詩人ゴーチエの娘と協力して出版した『蜻蛉集』(日本の古代詩歌仏訳集)は、日本文学紹介の嚆矢であり、その意味で西園寺公望は、おそらく日仏文化交流の先駆者であった。」(前掲書、頁94)ちなみに『蜻蛉集』とは *Poèmes de la Libellule*, Illustré par Yamanoto. Paris, Gillot, 1885 のことと思われるが、挿絵の Yamanoto については不明である。パリと言えば藤村と親しくなった画家山本鼎が有名であるが、彼のパリ留学は1912年のことで、時代が違う。ちなみに、この条約交渉に臨んだフランス代表クレマンソーと西園寺とはソルボンヌ時代同じ下宿で親交を結んだ仲であった。

<sup>7</sup> 前掲書、p.393、清岡卓行による解説の冒頭の部分による。ようやくアカデミズムにフランス文学が登場してくることになるのがこの時代であるが、大震災は『藤村のパリ』の著者河盛好蔵の人生にも大きな影響を及ぼしている。同年東京帝国大学仏文科に入学した河盛は震災を逃れ京都大学に転学し、その後関西で活躍することになる。

関東大震災からの被害はやはり甚大であり、藤田嗣治の言うような戦後の渡欧熱に冷水を浴びせるものであったに違いない。ようやくアカデミズムに登場したフランス文学研究も一瞬停滞を余儀なくされたのに対して、すでにパリに居て難を逃れた邦之助は着実にフランス語の実力をつけ、仏人と渡り合えるレベルへと到達しつつあった。文士たちの渡欧が盛んになるにはいまだ少し待たねばならない。その理由もやはり大震災であった。印刷・製本工場等インフラに甚大な被害を被った出版界は当然深刻な危機を迎えるが、ここでその窮地を救ったのが、1926年に改造社が打ち出したマスプロセールの走りとなった予約販売による「円本」であった。書価の高騰に喘いでいた一般読書大衆がこれに飛びつき、思いもよらぬブームとなった。これは作家たちにも好影響をもたらし、予想外の収入に慌てて渡欧のブームに便乗することになる。だが、余裕ができたときには次の世界恐慌が待ち受けており、このブームはあっという間にしぼんでしまう。震災のために「黄金時代のパリ」の絶頂期を味わうチャンスを逃してしまったというのが日本の作家たちの悲劇と言え言えるだろう。ともかく、邦之助が心酔した辻潤が渡仏できたのも、この円本ブームでマックス・スチルナーの翻訳が大いに売れたおかげであった。したがって辻潤との出会いは1928年まで待たなくてはならなかった。<sup>8</sup>

さて年表では割愛したが、アメリカ人たちの動向にも一言触れておかねばならないだろう。なぜならモンパルナスのもう一人の主役は紛れもなくアメリカの「ロースト・ジェネレーション」たちだったからである。1921年結婚したヘミングウェイは、シャーウッド・アンダーソンの勧めにしたがいパリ

---

<sup>8</sup> この経緯については、玉川しんめい著『エコール・ド・パリの日本人野郎』（朝日新聞社、1989年、頁33）に拠っている。ただし、玉川は春秋社の『世界大思想全集』所収の『自我経』（『唯一者とその所有』）としているが、筆者の調べる限りでは、同翻訳は1921年に、冬夏社そして改造社から出ている。その後1925年に改造社から改訂6版が出ており、この直後改造社から円本として再版になったと考えられる。さらに1928年の渡仏は第一回読売特派員という名目になっている。単純に円本ブームが可能にした渡欧とは考え難い。

に落ち着くことにする。彼の紹介状を手にすでにパリのアメリカ人社会の中心の一人となっていたガートルード・スタインの元を訪れる。このスタインと画商カウンワイラーそしてペギー・グッゲンハイム、このコスモポリット3人こそがモンパルナスを中心に燃え上がりつつあったモダン・ムーヴメントを背後から支えていた。ヘミングウェイはスタインの導きを得て、モンパルナスのロースト・ジェネレーションの中心人物へと駆け上がる。<sup>9</sup>

## 20 年代前半

マルセイユの巷には、黒衣に黒のヴェールをかむった喪服の女達が教会の帰りだろう、三々五々プラターヌやマロニエの冬木立の並木に沿って歩いていた。第一次世界大戦の終末からまだ日も浅い傷痕がありありと観られた。(中略)夢現のうちにリオンを通過した汽車は、時速百キロメートルぐらいの急速力で私をパリに運んでいた。

巴里!! 巴里!! 二年か永くて三年の滞在を考えていたその巴里に、十八年も住むような自分の不思議な宿命が待っているようなぞとは金輪際考えていなかった。<sup>10</sup>

もちろん、パリ到着当初の邦之助はフランス語もままならないまま孤独感にさいなまれていた。この時期に日本でにわか仕込みのフランス語会話を個人教授した佐藤朝山と付き合うのだが、彼が投宿するホテルに出向いたシーンは印象的である。

---

<sup>9</sup> この間の消息については、*The Autobiography of Alice B. Toklas in Selected writings of Gertrude Stein*, Vintage Books, New York, 1972 に詳しい。ちなみに「ロースト・ジェネレーション」の由来は、スタインの行きつけの自動車修理工場のメカニックが「おたくの車は、終わった時代のものだね "génération perdue"」とあっさり言っただけの科白が気に入ったからだと言う。

<sup>10</sup> 松尾邦之助『フランス放浪記』、鱒書房、1947年、頁11-12。

外はまだ明るいのにカーテンを閉めて酒を飲んでいた朝山は、長椅子に腰をかけ黙っている眼鏡をかけた三十四五の日本人を紹介して呉れた。この眼鏡男が其後の私の運命に決定的な方向を與へて呉れた東京日日の井澤弘だった。<sup>11</sup>

日本人会ともうまく付き合いながら、そのフットワークの軽さでパリを駆け回り始める邦之助。青春真っ只中の好奇心旺盛なまだ何ものでもなく、アカデミズムには属さない市井の感覚たっぷりの邦之助。彼は破天荒な芸術家やジャーナリスト（あるいは「文屋」というべきか）あるいはいわゆるパリごろとまで付き合い切り抜けるバランス感覚を持っていた。決して紅灯の巷に消えて行く人物ではないことを井澤は見抜いたのだろう。読売に邦之助を紹介するのが彼であるが、それは一時帰国する29年まで待たねばならない。

さらに、邦之助はソルボンヌで社会学を学ぶ女子学生と親しくなる。つまらない言い方かも知れないが、恋愛は確かに外国人をパリジャンあるいはパリジェンヌにする。しかし感心するのは、恋愛しつつも、それに溺れることなく知的、感覚的アンテナを張り巡らし続け、鋭敏に時代の流れを追って行く彼のタフネスさである。「狂乱の時代」と彼の存在が共鳴したためだろうとしか言いようがないのであるが、改めて考えても、絶妙のタイミングでこれまた絶妙の人材が「黄金時代のパリ」に舞い降りたものである。もちろん邦之助はモンパルナス周辺に居を定めることになる。年表で雑誌『エスプリ・ヌーヴォー』の創刊を取り上げたが、この雑誌はダダイストの詩人ポール・デルメと画家アメデ・オザンファンそして建築家ル・コルビュジェの三人が始めた雑誌であり、ダダそしてシュールレアリスムの歴史を『シック』、『ノール＝シュッド』、『リテラチュール』とともに彩ったが、邦之助はパリ到着当時からすでにダダやシュールレアリスムに興味を持っていたようで、徐々に

---

<sup>11</sup> 同上、頁18。

インタビューなどで付き合うようになる。そしてここでは是非とも紹介しておきたいことが、ル・コルビュジェとの繋がりである。

私は何となく、当時まだ坊やじみていた太郎に好意を示し、彼の一風変わったオリジナルな面を愛し、わたしが親しくしていたハンス・アルプや、ル・コルビュジェ（建築家）のよき協力者であった。（句読点原文ママ）キュヴィズム（<sup>原文ママ</sup>立派主義）から脱して、<sup>ピュリスム</sup>純粹派に属していたアメデオザンファンのアトリエなどを訪ね、太郎の良き案内役を果たしていた。<sup>12</sup>

彼の視界には、どの程度であったかは定かではないが、20世紀を造った建築家もしっかりと入っていたのである。

1923年の関東大震災は在パリ邦人たちにもかなりの動揺をもたらしたようで、邦之助も

パリで関東大震災を知り、どうなることかと思った。新聞記事によると「東海道筋まで廃墟となる」とある。わたしはこの頃、メロワという盲目の優れたインテリの婆さんの家に下宿していたが、この婆さんは、「国から送金が途絶えても心配しなさんな」と言ってくれた。<sup>13</sup>

---

<sup>12</sup> 前掲『風来の記』、頁151。太郎とは岡本太郎のこと。

<sup>13</sup> 同上、頁16、井澤との出会いについて、この引用の前後で邦之助の記述は混乱している。注10)では佐藤朝山の投宿先で出会ったことになっているが、まず「北白川殿下が、ノルマンディーの野で自動車を並み木の太木にぶつけて即死した事件があり、わたしが東日の井沢弘と大阪毎日の鴨居という新聞人を知ったのも、この事件がきっかけであり、」と述べている。ともかく井沢と知り合ったのは渡仏の翌年と早いことは確かであり、北白川殿下事故死の取材ですでに邦之助のフランス語の上達ぶりが伺える。この新聞記者との付き合いが20年代後半の日仏雑誌編集へと繋がると考えられる。

と語り、ひょっとしてとの不安に駆られたことを明かしている。もちろん故郷の遠州まで被害が及ぶ訳もないが、当時はまだ実家からの送金があったことが伺える。とりあえず二三年という予定は家族との約束でもあったようだ。新聞記者の手伝いや日本人会の雑用をこなしながらパリでの日本人脈を着実に広げ固める時代が1925年頃まで続く。ようやく20代も半ばになりかけようかという頃、すっかり「黄金時代のパリ」に馴染んでしまった邦之助にとって帰国など論外の話になってしまっていた。だが、同時に安定した職を持たない彼にとってつねに貧困の問題がつきまとうようになる。それを救った出会いが二つある。

## 20年代後半

### 藤田嗣治との出会い

第一の出会いは藤田嗣治とのそれであった。モンパルナス界隈の当時の雰囲気を邦之助は次のように描写している。

私がパリに現れた頃モンパルナスはかつての昔、画家で有名であったモンマルトルの殷盛を奪い、画家と云う画家の大部分がここに住んでいたし、住まないまでもみなこの区のカフェをランデーヴーの中心にしていた。

画家ばかりでなく、詩人や小説家や新聞記者のたまりであり、全世界の放浪芸術家が集まっていた。パルナス山の名にふさはしからず、極めて平坦な平凡な地形だが、ドーム、ロトンド、クーポール、セレクト、リラ等と云う有名なカフェが付近にあるアトリエや、裸女のデッサンをやる多くのアカデミと共に、世界唯一無二の呑気な自由な放浪的な雰囲気を作っていた。

ロトンドがまだ小さいカフェであった頃、カール・マルクスがしょんぼりここでカフェを飲んでいたらと云う。私の着いた頃、画家のキス



リング、フリエツ、ピカソ、シャガール、ロート、デュッフィ、ブラマンク、ザツキン等が時々顔をみせたが、ロダンの弟子ブルデルが…<sup>14</sup>

もっと引用を誘う興味深い部分だが、まさに「狂乱の時代」の雰囲気がいひひしと伝わってくる、現場を体験した者だけが書ける文章であろう。ここでは藤田の画業はとりあげないが、大戦前にすでに渡仏していた藤田はいわば定着日本人初期の代表であり、<sup>15</sup> 独自にパリ画壇での地位を築いていた。邦之助によると、二人の正式な出会いは1925年のパリ国際博覧会のことである。<sup>16</sup> 藤田は当時パリ右岸のブルジョア街に住んでいたが、彼のアトリエを友人の詩人ルネ・モオブランに請われて一緒に訪れたことから、急速に関係が深くなり、やがて肝胆合い照らす間柄になる。モオブランはハイカイ派の詩人であり、このことから、邦之助がすでにパリのジャポニザンたちの間でフランス語能力とかなり精確な日本文化に対する知識で知られていたことが伺える。これは本小論の仮説のひとつでもあるが、官制アカデミズムを背負わなかった「外語出の」松尾邦之助のいわば自由な立場はパリの「狂乱の時代」とその自由な個人主義の坩堝のような思想・文化状況を受け止めるのに有利

<sup>14</sup> 前掲『フランス放浪記』、頁33。

<sup>15</sup> 最近藤田の『腕一本』が講談社文芸文庫から近藤史人の編集で再刊された（『腕一本 巴里の横顔』、同文庫、2005）。その中の「パリの日本人」から引用しておく。「パリに同胞の遽かに増えたのは、大戦後である。大戦前は三、四十人に過ぎなかった。そのうち大使館員は、僅かに五、六人、画家は七、八人から十人位のもので、皆兄弟の様に親しくつきあっていた。（中略）それが大戦後は、大使館員だけでも八十人に増加するという有様で、現在ではフランスだけで、二千人の多数に上っている。そのうち三百人は画家である。」（頁82）、大震災がなければ恐らくこれ以上のスピードで増えたものと思われる。

<sup>16</sup> この博覧会は正式名称は Exposition Internationale des Arts décoratifs et industriels modernes 「現代装飾美術工芸博覧会」であり、いわゆるアール・デコ博として知られる。邦之助によれば「日本人会に働いていた私は、セイヌ河畔アレキサンダー橋の袂に建てられた日本館へ手伝いに行っていたが、我等の藤田さんは顧問格でこの日本館に来ていた。瀟洒たるネルの灰色の上衣で、細い紐をネクタイ代わりに軽く結んでいた彼は逢って話をして見ると気軽に、自然で、直ぐに親しめた。」（前掲『フランス放浪記』、頁35）

に働いたのではないだろうか。とにかく 1925 年以降、邦之助の人生は大きな展開を見せてゆく。

### 雑誌『フランコ・ニッポンヌ』の創刊から S.オーベルランとの出会い

…ただマメに働いていれば、何かのチャンスがころがって来るかも知れないと云うことだった…。若し仮にそんなチャンスがなくても、不平を知らない朗らかな生活を毎日していればそれでいい…。かうした処世哲学を身に浸みこませた私は、同じ貧乏仲間ののんき屋であった石黒敬七と協力してガリガリ版のパリ週報と云う新聞(?)を作ってパリの同胞に配っていた。当時パリには千人近くの同胞がいて…<sup>17</sup>

この『パリ週報』が機縁となり、奇人大金持ち<sup>18</sup> 中西颯政の知遇と安定したとはとても言えないながらも資金援助を得て、きちんとした雑誌『フランコ・ニッポンヌ』を発行することになるが、この雑誌によりパリのジャポニザン(日本通)だけにとどまらず日本文化に興味を抱く者たちの間に松尾の名は広まっていったようである。その創刊号を飾ったのは、藤田の描いた「日本人の黄色な顔とフランス人の赤い顔がたにしの様な格好でからんでいる妙な」<sup>19</sup> 表紙であった。内容は、

クロード・ファレルの発刊の辞につづいて藤田の小作文が発表された。アンリ・ド・レニエは未発表の詩を一つ…。ルネ・モオブランはフランス俳諧派運動の歴史を書いてくれた。<sup>20</sup>

<sup>17</sup> 同上『フランス放浪記』、頁 45。

<sup>18</sup> 前掲、玉川しんめい『エコール・ド・パリの日本人野郎』、頁 13。

<sup>19</sup> 前掲『フランス放浪記』、頁 50。

<sup>20</sup> 同上、頁 50。

早速反応があった。パリの日刊ル・ジュルナル (*le Journal*, 1892-1944) が3面で取り上げたほか、数紙が記事にし、雑誌 *Revue des poètes* は数頁を割いて批評を掲載してくれた。

編集の技術も出鱈目で、印刷屋の親仁が、気を利かせ、ゴチック活字とかイタリック体を上手に配列して多少モダン味のある体裁にして呉れたが、カルチェ・ラタンやオペラ通りの本屋に自分が腐心した雑誌がひやかしの通行人や学生の手でいぢくられているのを見ると得意にならざるを得なかった。<sup>21</sup>

1926年2月のことである。編集協力者の中にはすでにスティニルベル・オーベルランの名が挙がっている。

オーベルランとの出会いは「全き偶然のめぐり合い」であるが、これも一部を除いてあまり日本人とは付き合わないと言いながら、日本人会でアルバイトのような仕事をしていて、その関連で知ったギメ美術館で催された「東洋の会」に出たことによる。詳しい日付の特定できないことが残念であるが、1925年藤田と出会ったあとのことだろう。なぜなら、知り合ったオーベルランについて藤田に尋ねてみた邦之助に藤田はこう答えているからである。

「君、大変な好人と知り合いになったな。オーベルランは、僕もよく知っているよ。アルザスのストラスブールに行くと、オーベルランという町名まである旧い家柄、つまり名門の出の人だよ。彼の先祖は、フランス革命に協力したばかりか、ストラスブール大学の創立者なんだ。彼と協力しても悔いを残さないよ。まるで生き仏、聖者みないな爺さんだよ」<sup>22</sup>

---

<sup>21</sup> 同上、頁51。

<sup>22</sup> 前掲『風来の記』、頁90。しかし藤田嗣治の情報量には驚かされる、多少松尾の

つまり、恋愛から帰朝を断念するまでに至った段階で、藤田の知遇を得たことにより、展望が一挙に開けてきたのが1925年と言うことができる。年齢的にも25歳を過ぎ、青二才風も取れてきたころでもあっただろう。しかし、井沢とにしろ、オーベルランとにしろ、深く知り合うようになる過程での邦之助の真剣な議論振りそして勉強振りには驚かされる。また文献に当たる努力と手際のよさにも目を見張らされる。すでに前稿においてオーベルランについては触れておいたので、ここでは再び取り上げることをしないが、藤田、オーベルランという強力な後ろ盾と中西颯政という好事家の経済的な援助を得て、邦之助は次なる飛躍への助走を切ることになる。次のステップはオーベルランとの協同による翻訳の出版とその成功である。だがこの成功の背後には、1925年あたりから湧き上がるジャポニズムを認めておかねばならないだろう。詳述し証明するだけの資料が無く、またその能力もないのだが、恐らく1925年のパリ万博、アール・デコ博こそは、それまで一般には中国文化と区別されることの困難であった日本の伝統工芸をしっかりと提示することによって、浮世絵の大胆な省略とデフォルメと再構成の美学とならんで繊細に自然を様式化して取り込む日本の美意識が評価されるようになったためではないだろうか。アール・デコが世界的に開花するのもこの年であること、自然を大胆に取り込んで様式化する装飾性の新展開の中でジャポニズムは確実に新境地に入りつつあったのであろう。

1920年代後半の邦之助を取り巻く動きを次頁に年表で示しておこう。

なかでも其角の仏訳は松尾邦之助のパリでの地位を確かなものとするようになる。折からの日本ブームに乗って多くの詩人たちから評価され、名刺代わりにこの翻訳を持って彼は多くの芸術家を訪ね歩き始め、人脈を開拓していった。そして1928年、父親の危篤の報を受け一時帰国することになるが、

---

脚色が入っているにせよ、芸術家としては極めて広い人的ネットを築いていたことになる。確かにアルザスのWaldersbachには「オーベルラン博物館」Musée Oberlinが存在する。プロテスタントの説教師が先祖におり、日本の桜美林大学の名前にも反映している。

	ヨーロッパのできごと	日本のできごと	邦之助関係日本人の動向	同仏人他の動向
1925	パリ現代装飾工芸博覧会	治安維持法公布 普通選挙法公布	オーベルランとの出会い? 藤田嗣治と知り合う	José Corti シュール レアリスム出版設立
1926	ポアンカレ挙国一致内閣	大正天皇崩御, 昭和へ	Revue franco-nipponne 創刊	ブルトンナ, ナジャに 出会う
1927	リンドバーク単独大西洋 横断飛行成功	金融恐慌 芥川龍之介自殺 円本ブーム本格化	<i>Les haikai de Kikaku</i> ク レスより出版	
1928		3.15 事件	林芙美子『放浪記』連載 始まる	

これがまた新聞記者邦之助誕生のきっかけとなるのであり、25歳からの邦之助の人生自体が「狂乱の」状態に入ってゆくといっても差し支えない。それにしても、彼自身述懐していることだが、「黄金時代」は世界恐慌から戦争へと世界が転回して行く中であつたという間に収束へと向かい始める。戦争なかりせば、ジャポニスムはどうなただろうか。現在日本ブームが沸き立つのを見聞きするにつけ、感慨を禁じざるを得ない。

世界を動揺させた日本の野蛮な軍国調の一切は、欧州の不安に拍車をかけ、そのため、わたしの生活は、急角度に変転し、文学青年「むささび」と呼ばれたわたしは、たちまち、時局の奴隷にされてしまった。<sup>23</sup>

<sup>23</sup> 同上、頁95。